

『失樂園』における「天使」について

道家 弘一郎

『失樂園』に登場する人間はアダムひとりである。イーヴはアダムのあばら骨から造られた一心同体の妻であって他人ではない。したがってここには、人間界特有の個性も性格も階級も闘争心も求めるべきではない。その代り天使はオールスターキャストで揃っている。天使の間には個性も性格も階級も分裂も戦闘も、そして最後の大団円もある。つまり天使がすっかり人間の代りを果たしている。本稿は、『失樂園』において、天使がどのように描かれているかをもっぱらテキストのなかに辿ったものである。

天使ラファエルは神に遣わされて、墮落前のアダムに、過去の歴史、いま彼が置かれている境遇や彼の敵について語り、「守るべきこと」を説く。

墮落後は天使ミカエルが遣わされて、アダムに行く先の救いの途、未来の展望を示して「信ずべきこと」を説く。そうして楽園の外へアダムとイーヴを導く。

いっぽう、アダムとイーヴを誘惑する悪魔サタン自身も、墮落したとはいえ、本来は天使として造られた者で

あった。

そもそも天使とは何であるか。angelは、ギリシア語 *αγγελος* (*aggelos*) に由来し、神の使者を意味する。オックスフォード英語辞典では、第一義に、'A ministering spirit or divine messenger' (神に仕える霊、または神の使者) とあり、「能力と知性において人間に優る^ま靈的存在者の集団の一員で、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、その他の神学においては、神の従者、また使者である」と説明する。そして直ちに、第二義として「先には神の天使であったといわれる、墮落した、または反逆した、spirits (霊たち) の一員」とある。

自然の階梯

『失樂園』における天使は、まさにその字義どおりの存在である。天使は能力と知性において人間に優るといふが、それを説くのは第五卷469―505行の、天使ラファエルがアダムに、自然の階梯 (the scale of nature, 509) を説く箇所に見出される。天使は、人間には乏しい直感的理性に富み、人間には適しなにか軽すぎると思われるような食物を食べ、人間の肉体が浄化されたような「天使固有の実体」をもち、翼があつて、空中高く飛翔することも、あるいは自分の好むがままに地上でも、天上の樂園でも自由に住むことができるのである。「天使固有の実体 (549)」とは、彼らが住む最高天、清火天にふさわしい (117) 実体という意味である。しかも、たとえ罪を犯して地獄に墜ちても、決して消滅することなく、「無」に帰することはありえないものである (210―101)。その実体はまた靈的 (spiritual, 458) とはいわれ、物質的な障壁は軽々と飛び越えることができる。同時にサタンがミカエルの太刀を受けたときのように、無残な大きな傷口もすぐに塞がってしまう (632―334)。

このように天使「固有の実体 (proper substance 五493)」は、*'empyreal, 一117'*であり、*'spiritual, 四585'*であり、*'ethereal, 六330'*である。つまり、火であり、風であり、空である。本来「下に在る」を意味する *'substance'* (実体) の質料としては、形容矛盾・真逆のものばかりである。

第一質料から始まって天使に至る、第五卷469—505行の「自然の階梯」では、降ることが昇ることになり、進むことが戻ることになる。神に直接触れるものが第一質料であり、天使であるからである。しかもこの移行は円環的なものではなく、垂直的なものである。こうして下なるものが上になり、上なるものが下になる。

... one Almighty is, from whom

All things proceed, and up to him return, ...

V. 469—470.

唯一の全能者が存在し、万物は彼から発し、彼に戻ってゆく。

全能者はまた「遍在者 (Omnipresence 七50)」でもあるから、どこまで降っても神があり、どこまで昇っても神がある。

ミルトンの天使における特徴は、一つは人間の食物を食べることであり、もう一つは、人間の性交と同じような愛の行為を行うことである。それは、あのミルトン特有の連続的に繋がる「存在の連鎖」からすれば当然の帰結である。その位置が神に近づくにつれ、次第に浄化・靈化・純化されるとはいえ、本来一つの原質料から発生したものだからである。

しかし、進化の果に、最後の被造物として天使が造られたように想像してはならない。『失樂園』では、天使は、天地創造より前に創造されているからである。

天使の食べ物

第五巻のアダムが天使ラファエルに食事を勧める場面では、人間の食べ物と天使の口に合わないのではないかと気遣うアダムに、ラファエルは答える、「純粹に叡智的存在である天使にも、理性的な人間と同じように食べ物が必要である。天使も人間も、ともに、あらゆる下級な感覚機能を内蔵しており、それによって聞き、見、嗅ぎ、触れ、味わう。味わうことによって混ぜ合わせ、消化し、吸収して、肉体的なものを靈的なものに変えてゆく(五407—413)」と。

food alike those pure

Intelligent substances require

As doth your rational; and both contain

Within them every lower faculty

Of sense, whereby they hear, see, smell, touch, taste,

Tasting concoct, digest, assimilate,

And corporeal to incorporeal turn.

V. 407—413.

人間には軽すぎると思われる天使の食べ物とは、いったいどんなものであろうか? 「天国では、多くの生命の樹が神々にふさわしい果実をつけ、葡萄の実も神酒のような甘美な液を生じ、……また朝ごとに枝に宿った甘い朝露を払い落すと、地面は煌めく真珠のようなマナで蔽われる(五426—430)」。

... in Heaven the trees

Of life ambrosial fruitage bear, and vines

Yield nectar; . . . from off the boughs each morn

We brush mellifluous dews, and find the ground

Covered with pearly grain; . . .

天使の食_レ物は、ambrosia と nectar と manna である。古典神話と旧約聖書から借りるほかはなかつたのである。

天使の体

このような食物で養われた天使の体は、人間とは異なり、心臓や頭脳、肝臓や腎臓といった内臓器官の、それぞれの器官において生きており、あたかも全身これ心臓であり、頭脳であり、眼であり、耳であり、知性であり感覚であるかのように生きており、自由自在、その思うとおりの体軀を自ら具え、また好むがままに、疎密さまざまに色、形、大きさを具えることができた、³⁴⁴ という（六³⁴⁴—³⁵³）。

Spirits . . . live throughout

Vital in every part — not, as frail Man,

In entrails, heart or head, liver or reins —

• • • • •

All heart they live, all head, all eye, all ear,

All intellect, all sense ; and as they please

They limb themselves, and colour, shape, or size

Assume, as likes them best, condense or rare.

VI. 344—353.

だから墮落天使とはいえ、どこを切られても死ぬことはない。

また、その体は伸縮自在で、地獄の万魔殿では、「地上の巨人族を凌ぐかと思われるほどの巨体の持主が、一転、インドの小人族^{ピグミー}か、森の小妖精のような小さな体になり、狭い部屋に群がり集まっている（一756、777—783）」。
このように、墜ちたとはいえ、「非肉体的な天使たちは、その巨大な形を極端に矮小な姿に変え、……この地獄の宮廷の大広間の中を自由無碍に飛びまわった（一789—792）」、という。

大小どころか、サタンは、「禿鷹^{はげたか}（三431）」にも「狼（四183）」にも「鵜（四196）」にも「蝦蟇^{がま}（四800）」にも「蛇（十514）」にも変身することができた。

楽園の宴

第五巻から始まって第八巻にかけて『失楽園』のなかでも最も哲学的神学的議論が語られるのは、エデンの園の草上の昼食であった。「その間、イーヴは裸身のまま食事につき添い、風味豊かな飲物を溢れるばかり二人の杯に注いでいた。ああ、なんとという、楽園にふさわしい無邪気さ！ もしも神の子である天使達がその姿に魅せられるのもやむをえない、という時があったとすれば、まさにこの時であつたらう（五443—448）」。

Meanwhile at table Eve

Ministered naked, and their flowing cups

With pleasant liquors crowned. O innocence

Deserving Paradise! If ever, then,

Then had the Sons of God excuse to have been

Enamoured at that sight. . . .

V. 443—448.

宴は延々と続いて、「夕陽が、この大地の緑の岬と緑の島々のはるか西に沈みかけている (the parting sun / Beyond the Earth's green Cape and verdant Isles / Hesperian sets, . . . 八 630—632)」時刻に及んだ。話も終りに近く、アダムは抑えがたく激しいイーヴへの溺愛ぶりを語る。天使は、「肉の快樂 (carnal pleasure 八 593)」に溺れることなく、愛を階梯として天の愛へと昇ってゆかなければならない、と説く。アダムはそれを認めた上で、天使たちの愛について問う、「天使たちは愛しないのですか、愛をいかに表現するのですか?」と (八 615—616)。ラファエルは、愛に特有の色である蔷薇色に、いかにも天使らしくほんのりと頬を染めて、こう答える、「愛がなければ幸福ではない。お前が肉体において享受している清らかなものならなんでも、わたしたちはすべて豊かに享受している。皮膚とか関節、手足といった邪魔な障害物は何も無い。天使たちが抱擁するときは空気と空気が交わるよりも軽やかに、純粹と純粹との合一をめざして全面的に交わり、肉体は肉体と、魂は魂と交わるような制限された交わ

り方は必要ではないのだ（八 621—629）」。

without love no happiness.

Whatever pure thou in the body enjoy'st

．．．．． we enjoy

In eminence, and obstacle find none

Of membrane, joint, or limb, exclusive bars:

Easier than air with air, if Spirits embrace,

Total they mix, union of pure with pure

Desiring, nor restrained conveyance need

As flesh to mix with flesh, or soul with soul.

VIII. 621—629.

熾天使の姿

天使の体はあのようなものであり、それを養う食べ物も、愛の表現も、このように人間離れしたものであるが、その普段の姿形はどんなものであるのか？ イザヤ書六章二節にあるように最高位の熾天使は六つの翼を持っていた。「二つをもって顔を覆い、二つを持って足を覆い、二つを持って飛び交っていた」とあるが、これが『失

樂園』第五卷では、「広い肩をそれぞれ覆っていた一對の翼は、肩ばかりでなく胸部の方までかぶさり、王者の如き飾りとなっていた。次の中央部の一對は、煌めく星の帯といった風に腰をとりまくのみならず、腰から股にかけて、金色やその他天上で染められた多彩な色合に輝くその和毛にこげで一面に覆っていた。三番目の一對はその碧空のように青い、しかも鎖帷子くわいすいそっくりの羽毛で脚から踵までを覆い隠していた（五278—285）」と敷衍される。

the pair that clad

Each shoulder broad came mantling o'er his breast

With regal ornament; the middle pair

Girt like a starry zone his waist, and round

Skirted his loins and thighs with downy gold

And colours dipt in heaven; the third his feet

Shadowed from either heel with feathered mail,

Sky-tinctured grain.

V. 278—285.

天使の姿のなかで、私がいちばん美しく、それゆえ慕わしく思うのは、第三巻に描かれる箇所である。第三巻は天上界の消息で、アダムの誘惑の仕事に着手しようとするサタンの姿を、神は、その右に坐す御子に示し、アダムの随罪を予言すると同時に、アダムの救済の意向と、贖罪の必要を語る。御子は自ら贖罪を申出る。神は御子を

迎えいれ、天と地のなにものよりも高く、御子の名の揚がらんことを告げ、すべての天使に御子を崇めることを命ずる。すべての天使は一斉に歓呼の声を揚げ、高らかな讚美の叫びが天をじよもした。彼らはいずれの王座に向かつても恭しく頭を垂れ、不凋花と黄金の編みこまれた冠を脱いで地面に置いた。この不凋花をとって、光輪に取りまかれた髪をしばらく、ふたたび冠をかぶり、箆のように脇にかかえた堅琴にあわせ、声を揃えて、父なる神と御子を誉め賛えた。その莊嚴な言葉と、天使たちの姿とその美しさに読者は魅せられる。

先ず、父なる神を称えて歌う、「父よ、あなたは全能にして不変、不死にして無限、永遠なる王にましまし、万物の造り主、光の泉にあらせられるも、煌々たる光のなかに御姿は見えず、近づき難き玉座に座したもう。わずかに、照り輝く神殿のごとく御身に引きまとわせたもう雲を透かして眩き光を陰らせたもうも、あまりの輝きに裳裾の黒くあらわれ、なお天使たちの眼は眩み、光輝第一の天使さえ近寄りもならず、二つの翼もて両眼を被う(三372—382)。」

Thee, Father, first they sung, Omnipotent,

Immutable, Immortal, Infinite,

Eternal King; thee, Author of all being,

Fountain of light, thyself invisible

Amidst the glorious brightness where thou sit'st

Throned inaccessible, but when thou shadest

The full blaze of thy beams, and through a cloud

Drawn round about thee like a radiant shrine

Dark with excessive bright thy skirts appear,

Yet dazzle Heaven, that brightest Seraphim

Approach not, but with both wings veil their eyes.

III. 372—382.

熾^{セラフ}天使の恭しく頭を垂れるばかりか、二つの翼で両眼を被う、という行為の示す従順と謙譲は、天使の美しさの極致であろう。

序ながら、『失樂園』のなかで天使の翼の言及は熾天使についてだけであるが、一般的には、首位の熾天使には三対六翼（イザヤ六二）、二位の智天使には二対四翼（エゼキエル二十一）、三位の座天使には翼が無く、四位の権天使以下、九位の天使に至るまで、全ての天使は一对二翼と、考えられている。

キリスト

天使たちは次いで御子を称える。見えざる全能の父を具現化した御子の姿と、諸天の天とそこに住むすべての天使を創造した偉業と、反逆天使を駆逐した功績とを称える。しかし、それにもまして天使たちが称えるのは、既往の業績ではなく、やがて悪魔に誘惑されて墜ちるであろう人間の罪を贖うために自ら死につくことを申し出

られたことである。

だが、これはまだ後になって起こることである。今、人祖アダムとイーヴは、後の運命はつゆ知らず、幸多き楽園のなかで、二人だけの愛と飲びの生活を満喫している。

一方、天上にあって、サタンの動きと地上の人間の営みを見下している父なる神と御子は、人間が誘惑され墮落することを予見し、贖罪の必要を語る。父は贖罪ばかりか復活、再来、最後の審判、新天地の出現にまで言及する（三〇―三三）。この長い時間のなかで、いかに贖罪が重要な出来事であるか、水平的に経過する時間の線に、垂直的に神の愛が突き刺さってくるのが、十字架であることを、一〇〇行（三二〇―三二七）に余る行数で縷説している。矢内原忠雄『土曜学校講義八』（四〇）を引く、

『樂園喪失』の主眼はキリストの愛です。ただその中で活躍をする人物としてはサタンですが、サタンを描くことがミルトンの主眼ではなくて、キリストの愛を描くことがミルトンの主眼なのでしょう。サタンは、いま、悪い心をもって地球に近づいてきております。そのことを天から見通されて父なる神とキリストとがこうして会話をかわされた。どうしてやろう、どうしようという現在の状態と今後の先々までの神の御業・神の経綸の相談があったのです。

なお、この対話中、父なる神は、最後の審判のとき、一切を支配する権を御子に与え、すべての天使を御子の指揮下に置く、と宣言する。

Here shalt thou sit incarnate, here shalt reign
Both God and Man, Son both of God and Man,
Anointed universal King. All power
I give thee; reign for ever, and assume
Thy merits; under thee, as Head supreme,
Thrones, Princedoms, Powers, Dominions, I reduce:
All knees to thee shall bow of them that bide
In Heaven, or Earth, or under Earth in Hell.

III. 315—322.

この玉座に汝は受肉せる者として坐し、この玉座に坐して、
神にして人なる者として、神と人の子として、
油注がれし万物の王として、支配するがよい。
一切の権力を私は汝に与える。永久に支配し、
汝の当然受くべき誉れを受けるがよい。至高いとたかき首かしらとして、汝の指揮下に、
私は座天使、権天使、力天使、主天使の群れを置く。

すべてのものが、――天にあり、地にあり、地の下の地獄に

あるすべてのものが、汝の前にその膝を屈するであろう。(三 315―322)

この一節は、コロサイ書一章13―17節、とりわけ16節(「天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られた」)、ピリピ書一章6―11節、とりわけ10節(「天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえる」)、エペソ書一章20―22節(「神は、キリストを、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、すべてのものをキリストの足のもとに従わせた」)などの聖句にもとづくことは明らかである。

天使の階級

王座、主権、支配、権威、勢力、などはすべて天使の階級を示す。

天使の階級については、河野興一『哲学講話』(23ページ)に要領のよい表があるので、それを転載する。二通りの説があり、一つはディオニシオス・アレオパギタの説、もう一つはグレゴリウス大法王の説である、という。

	ディオニュシオス	グレゴリウス
第一のヒエラルキア	セラフイム ケルビム 王座 Throni	セラフイム ケルビム 王座 Throni
第二のヒエラルキア	主権 力 権能 Dominations Virtues Potestates	主権 かしら 権能 Dominations Principatus Potestates
第三のヒエラルキア	かしら 大天使 天使 Principatus Archangeli Angeli	力 大天使 天使 Virtues Archangeli Angeli

『失樂園』にも、「三階級三階層に分かれた熾天使、能天使、座天使等の各天使群 (Seraphim and Potentates and thrones / In their triple degrees, V. 749—750)」とある。

一七三四年に出版されたリチャードソン父子による注釈書 (Explanatory Notes and Remarks on Milton's Paradise Lost, by J. Richardson, Father and Son.) には、「三階級に三階層があるとして、ディオニュシオスと同じ順序で天使の名前を列挙している。『失樂園』のいろいろな箇所では、天使の名前がさまざまな組合せで挙げられてい

るが、一挙に全部が列挙されることはない。それは、「一度にすべてを挙げることは多すぎるからであろう（243ページ）」と記している。

それにひきかえ、天使全部の名前を列挙しているのは、ダンテの『神曲』天国篇第二十八歌98行から126行である。しかも130行目にはディオニュシオスの名が出ており、同じく天国篇第十歌115行目では「天使の性質とその職務についてもっとも通曉した人だった」という。そして「ディオニュシオスこそ、天使の階級のことを熱心に考察し、私が見るのと同じように、分類し命名した」（天国篇二八130―132）と記す。そして、それに続く三行は「だがグレゴリオスはのちこれに異を唱えたが、この天国に來たりて眠ひらき、おのがあやまりを知って微苦笑する」（天国篇二八133―135）というものである。

グレゴリオスは、いわゆるグレゴリオ聖歌をつくったグレゴリウス教皇（在位590―604）。ローマ皇帝トラヤヌスは最後の遠征の帰途キリキアのセリヌスで死去し地獄に墜ちていたが、グレゴリウス教皇のとりなしの祈りにより、蘇って改悛の機会を与えられた、という伝説が中世には広く行われるなど、大教皇と呼ばれた人物である。

ディオニュシオス・アレオパギタ

ところで、ディオニュシオス・アレオパギタとは、パウロの肉声を聞いたアテネ裁判所の判事である。アレオパゴスは、アクロポリスの北西に当たる丘で、「アレスの丘」を意味する。ギリシアの軍神アレスが海の神ポセイドンの子ハリローティオス殺害のためにここで審判を受けた最初のものであったという故事に基づく。それ以

来この丘はアテネ最古の会議または法廷の場所となった。

パウロもまたその思想を質すためここに呼ばれて、緊張を感じたに違いない。帝国の首府はローマであるといえ、アテネは依然として学芸の由緒正しき古都であった。アテネ伝道はパウロの説教のなかでも最も哲学的な説教とならざるを得なかった。だが、ことが福音の核心、死者の復活ということに及ぶと、ある者はあざ笑い、ある者は、「いずれまた聞かせてもらおう」といって、去っていった。しかし、彼について信仰に入った者も、何人かいた。その筆頭がディオニシオスで、他は、ここ使徒行伝にのみ名を残す女性ダマリスやその他の人々数名であった。アテネ伝道は完全な失敗に終わった。

しかし、岩下壮一は、興奮した口調で、「異邦人の使徒パウロが、アテネのアレオパゴスに於いてキリスト教を説いた日は、実に人類にとっては『聖』な日であった。この日に於いて歴史あって以来始めて、神の智慧と此の世の智慧とが、両者の典型的な代表者によって相接觸したのであった」（『中世哲学思想史研究』、4ページ）と語る。ここに精神としてのヨーロッパが成立したのである。ディオニシオス・アレオパゴスこそ最初のヨーロッパ人であった。アテネの初代の司教となり九五年殉教した（野上素一『神曲』234ページ）。

ところで、天使を九つの階級に分類するのは「天上の位階」という文書に由来する。これとともに「教会の位階」、「神名論」、「神秘神学」、書簡十一通、祈祷文など一連の文書群があり、十六世紀までは一般に、この使徒行伝（十七³⁴）が伝えるアテネのディオニシオスが書いたものとされてきた。エリウゲナ（今道友信『中世の哲学』204）やアベラール（前掲書286）は彼に深く傾倒したが、彼の文章に矛盾を発見し、「今となつては誰の手にな

るものか知る由もないこの一群の思弁神学的文献は、もともとは紀元五〇〇年前後に成立したもので、シリアの修道院に属する神秘思想の学者によって書かれたものであろう」という（前掲書196）。これが『偽ディオニュシオス文書』といわれるものである。

しかし中世では多くの学者によってラテン語に翻訳・注解され、西欧スコラ学に大きな影響を与えたといわれるから、ダンテの『神曲』では天国篇第二十八歌の末尾という枢要な場所に九段階すべての天使の名前が出揃うのであるが、十七世紀ミルトンの『失楽園』では、パウロ書簡の先例にならって、天使の称号の列挙はいくつかに止めたと考えられる（コロサイ一16、二15、エペソ一21）。

九品仏

お寺の出身であり自ら僧侶でもあった寿岳文章氏は、その翻訳『神曲』の注釈において、セラフィム、ケルビムの次、王座を御座みざと訳し、「言はば上品上生・上品中生・上品下生の三位階」（天国篇、215ページ）という。大井町線九品仏駅に近い九品仏浄真寺には、本堂の対面に三つの阿弥陀堂（上品堂・中品堂・下品堂）が並び、それぞれに三体ずつ上生・中生・下生の阿弥陀如来像が安置されている。この上品上生から始まって下品下生に至る九段階は、信仰の篤い者から極悪人までのすべての濟度されるべき人間を指すのであって、ひとりの阿弥陀如来が九通りの「印相」（手の位置と指の形）をもって万人救済の慈悲を示しているのである。したがって、この注は当たっていない。むしろ、

如来	{ 釈迦 阿弥陀 薬師 など
菩薩	{ 弥勒 文殊 地藏
明王	{ 不動 愛染
天	{ 毘沙門 大黒 金剛力士

右の分類は、仏の階層を示している。

因みに、『失楽園』で最も活躍するラファエルとミカエルは、天使のどの階級に属しているのだろうか。ふたりにとも大天使とされる場合が多いが、ラファエルは、神命を受けて楽園に降りたとき、彼本来の「熾^{セラフ}天使」の姿であった（五二七）とある。

いっぽうミカエルは、当然、熾天使とされてしかるべきなのに、「大天使」に止まって、熾天使に位置づけられることは決してなかった。

そもそもミルトンは、ディオニシオス・アレオパゴスのこの階層秩序に、全面的に従うわけではなく、就かず離れずの微妙な立場を取っているように思われる。

キリスト高擧

ところで『失樂園』において、すべての天使が一堂に会するのは、キリスト高擧のときである。その盛大なること、天の隅々からおびたらしい天使の群れが、それぞれの指揮者に率いられ、高々と旗幟を掲げて集まり、全能者の王座のまわりに巨大な円陣を作ったのである。各軍団の軍旗には、意匠化された勲功が描かれ、翩翩とひるがえっていた（579―594）。

中央に立った父なる神は、かたわらに御子を従えて、語った。

今日、わたしは、わが独子と

宣言する者を生み、この聖なる山においてその頭に油を注ぎ

王と定めた。彼は汝らが見るごとく今わたしの右手に坐っている。

わたしは、彼を汝らの首と定める。そして、天のすべての者が

その前に跪き、彼を己の主と告白することを求めようと

自らに誓った。汝らは、わたしの摂政としての彼の支配に

属し、一つの分かつことのできない魂として一致し

団結して、いつまでも幸福にくらしてもらいたい。

彼に背く者はとりも直さずわたしに背く者であり、

一致団結を破壊し去る者なのだ。したがって、その者は

神であるわたしの傍らから、またわたしを仰ぎ見る
至福の座から追われ、いや果ての暗黒の奈落に、とこしえに
償われることのない定め場所に、呑みこまれるはずだ（五 603—615）。

This day I have begot whom I declare
My only Son, and on this holy hill
Him have anointed, whom ye now behold
At my right hand ; your head I him appoint,
And by myself have sworn, to him shall bow
All knees in Heaven, and shall confess him Lord.
Under his great vicegerent reign abide
United as one individual soul,
For ever happy. Him whom disobeys
Me disobeys, breaks union, and that day,
Cast out from God and blessed vision, falls
Into utter darkness deep engulfed, his place
Ordained without redemption, without end.

全能者の、この言葉に、すべての天使が歓喜したようであった。確かにそのように見えたが、事實は必ずしもすべての天使ではなかった。サタンは、最高位の天使でこそなかったが、権力においても、寵愛と名譽においても卓越した天使であった。しかるにこの日、御子が父なる神によって栄光を与えられ、油注がれた王、救い主と宣言されると、サタンは「嫉妬 (envy 五 662)」に駆られ、「傲慢 (pride 五 665)」にもこの光景にたえられず、自分が不当に貶められたと感じた。悪意と憤怒の念は収まらず、深夜の訪れを待って、麾下の全員を率い反逆の途に出た。口実は、神の命によって北の領地に帰り、新しい法を伝えるに來る救世主歓待の準備をするためであった。彼に従うものは、全天使の三分の一にも及んだ。

いったい、それはどれほどの数であったのであろうか。パトリダスは、ルネッサンス時代のユダヤ教律法集タルムードの記事にしたがって、三十億百六十五万五千百七十二 (301,655,172) という天使数を挙げている。(C. A. Patrides, *Milton and the Christian Tradition*, P. 94)

サタンの反逆

サタンは、いかなる論陣を張って、天使を反逆へと駆りたてたか？ 神は全天使に、御子の前に跪き、御子を己が主と告白することを求めた (五 607—608) だけだが、サタンは、「いまだかつて行ったこともない跪座の礼と、醜悪なる五体倒置 (Knee-tribute yet unpaid, prostration vile, 五 782)」を強要するものと誇張する。

だがサタンの論理にも一理ある。ひとりの神を拝すべきなのに、その「像 (image 五七四)」にまで膝を屈めよとは如何。天使は本来、誰にも支配されない「天の住人、天の子達」(Natives and Sons of Heaven 五七〇)として、階級に違いがあるにせよ、等しく自由な存在で、自由においては「御子と同等な者 (His equals 五七六)」として生きる権利がある。なんの過ちもなく生きてきたものの上に、誰かが王者として君臨する理由も権利もない、というのだ(五七二―八〇二)。隷属することではなく支配することを使命とするわれわれの誇り高き称号を侮辱するものだ、という結びの二行は、演説冒頭の呼びかけ「Thrones, Dominations, Princedoms, Virtues, Powers」(五七二)に呼応する。

キリストの先在

サタンのこの主張を覆すものは、キリスト先在の教義しかない。即ち、「御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています(コロサイ一15―17)」というパウロの信仰である。『失樂園』のなかで、サタンに対し、パウロのこの言葉を、ほとんど繰返すように語ったのは、最高級の階級、熾天使セラフに属するアブディエルであった。名は体をあらわすというところ、彼の名は「神の僕」を意味する(五八三―八四一)。

サタンは納得するどころか、ますます反発を強めて、父からその子へと渡された二番手の作品というのか、そもそも創造が行われるとき誰が見ていたか、創造されたという記憶がお前にはあるのか、と息巻き、結局は自然

発生論に行きつく(五853—858)。

キリストの誕生は、「天の大いなる年がもたらしたといえる或る日 (on a day... on such day / As Heaven's great year brings forth 五579—583)」といい、サタンの出生は、「運命の流れが一めぐりした時 (when fatal course / Had circled his full orb 五861—862)」という。

great year は、O・E・Dには「すべての天体が元の位置にもどると考えられた年」とあり、まさに『失樂園』のこの箇所が引用されている。あたかも天体の選暦のようであり、年数についてはさまざまな計算がある、という。多くはプラトン『ティマイオス』39C—Eにもとづいて三万六千年とするが、H・Y・ヒューズの注では、六〇〇年から四万九千年まで、さまざまに計算される、という。

しかし、イエスの誕生が新しい紀元を画したように、天における、宇宙いまだ在らざるときにおける、このキリストの高挙こそ、「大いなる年」の始まりでなければならなかった。その年の、その日は、サタンにとっては「運命」の一日であった。

サタンの旧名

墜ちる前のサタンの名前が何であったかについては二通りの見方がある。一つは、「あの反乱の結果、生命いのちの書かみから消し去り削り取られたために、天国の記録に彼らの名前を思い出させるものは何もない」(一361—363)とあるから全く分からないというものであり、もう一つは「ルシファー」であったとするものである。

前者は、サタンもルシファーも、ともに墜ちた後の名である、とする（一 81、82ヴェリテイ注）。

そもそもルシファーは、ラテン語の *Lux + ferre* からなり、形容詞としては「光を発する、明るく照らす」を意味し、名詞としては「明けの明星、金星」を表わす。これがサタンを指す語になったのは、イザヤ書のなかに、自分を至高者として高ぶったバビロン王の滅亡が明けの明星の天からの墜落に譬えられている記事に由来する。

ああ、お前は天から落ちた

明けの明星、^{あけぼの}曙の子よ。

お前は地に投げ落とされた

もろもろの国を倒した者よ。

かつて、お前は心に思った。

「わたしは天に上り

王座を神の星よりも高く据え

神々の集う北の果ての山に座し

雲の頂に登って

いと高き者のようになろう」と。

しかし、お前は陰府^{よみ}に落とされた

墓穴の底に。

〔文語訳では集会の山〕

『失樂園』五卷760-766行は明らかに、このイザヤ書の一節を踏まえている。

いっぽう明けの明星は、「光をもたらせるもの」としてキリストの再臨をさしても引用される(IIペテロ一19)。さらに、聖書の最終章 ヨハネの黙示録二二章16節には、イエスの最後の言葉として「わたしは、……輝く明けの明星である」とある。さればこそ、暁星学園とか明けの星学園という学校名も生まれるのである。

ルシファーが聖書に登場するのは、もとよりウルガタ聖書からであり、イザヤ書十四章12節には、‘Lucifer’の文字がある。これはサタンを指すものであるが、ペテロ後書一章19節には、主イエスを指すものとして‘Lucifer’が使われている(英訳では the day-star)。このようにルシファーには輝かしい明けの明星の名として両義性があった。『失樂園』には三箇所、この名前が登場する。

第一は御子が油注がれし王、救世主と宣言されたあの高峯のとき、反逆の謀議を企てたサタンが、饗応の準備といつわって集合を呼びかけた場所が、「大ルシファー宮殿 (The Palace of Great Lucifer 五760)」であった。ルシファーに何の悪い意味もないからこそ、熾天使アブディエルも招集に応じて馳せ参じたのである。

第二は、サタンがかつては天使の群れのなかでも最も輝ける天使であったために、星のなかの星ともいふべきあの明けの明星ルシファー(七131)の名をもって呼ばれたという箇所である。ここは落ちる前のサタンの名前が、ルシファーであったのか、と思わせる箇所である。

そして第三は、地獄の「万魔殿が誇り高きルシファーの都、また王座 (Pandemonium, city and proud seat / Or

Lucifer, 1424-1425) と呼ばれたという記述である。ここではルシファーはサタンと同義であり、ヴェリティの注釈のように墮落後の呼び名であって、墮落前の名前の証明とすることはできない。

墮落天使たち、その主だった者は、「人間の姿を遥かに凌ぐ、神々しくかつ英雄然たる姿、格好で、堂々たる王者の風を示していた（一358-359）」。しかし、起こした反乱のために、生命の書からは完全に抹消され、天国の記録にその名前は跡形もないという（一361-363）。

それゆえ、「反乱の首謀者、仇^{あだ}なす「敵の長^{おき}（二81）」は、天国では、ただ「サタン」と呼ばれる。サタンはヘブライ語で「敵」を意味する。やがて第五巻でも、「今、彼をサタンと呼ぶのは、以前の名前がもう天国では聞かれなくなったからだ（五658-659）」と念を押す。

パウロがコリント後書のなかで、偽使徒たちに騙されるな、と諭して、「サタンでさえ光の天使を装う」（IIコリント十一14）ことがあるから、という箇所がある。ウルガタ聖書では、ここは 'Satanas transfiguratur se in angelum lucis' となっている。サタンが 'lucifer' と同義となる一歩手前のように思われる。ダンテの『神曲』では、「ルチフェロ」という呼称が目立った。

ところで、近代語訳の聖書のなかで「ルシファー」の名を記すものは、ただ欽定訳聖書 (Authorised Version, 1611) だけで、しかもイザヤ書十四章12節においてのみ。独訳、仏訳、邦訳とも、原典に忠実であろうとして、

ウルガタのラテン語にとらわれないが、さすがに欽定訳は長い中世の伝統を受け継ぐところがあったのであろう、と想像される。

さて、『失樂園』にもどって、御子が救世主と定められた、かの高峯の宣言は「聖なる山」(五〇四)で行われた。この「聖なる山」に模して、ルーシファが集合をかけた場所は「集合の山」(The Mountain of the Congregation 五七六)と呼ばれた。そこに「大ルーシファ宮殿」が建ていたのである。それは「山の上に山がそりたつように、金剛石の鉞山から切り出した石材や黄金の岩から作られた尖塔スピリットや高塔のかずかずを擁し、燦然と四方に輝きわたる、高い山上の王宮(五七六―七五九)であった。

「罪」の誕生

サタンは、「敵の長」(the Arch-Enemy 一八一)と呼ばれるが、サタンはサタンでキリストを「われらの敵」(Our Enemy 一八八)と呼んでいる。互いに対立関係にある相手を「敵Enemy」と呼び合うので、この語が固有名詞となることはない。興味ぶかいことは、第二巻においてかの大ルーシファ―宮殿で神に対し「反逆を企てる会議を開いていたとき、サタンは突然激しい苦痛に襲われ、眼が霞み、暗くなり、朦朧となった。そのとき頭から炎々たる焔が噴き出し、左の部分が大きく割れて、そこから、輝く姿も顔もサタンにそっくりな、それでいて神々しいほど美しい、武具をまとった女神があらわれた。それが「罪」である(二七九―七六〇)、という。それは、ギリシア神話の女神アテーナーが、「大神ゼウスの頭部から、すでに武装をし、甲冑をつけ槍と楯を持って生まれたとい

う」(呉茂一『ギリシア神話』上82) 伝承をふまえている。アテーネーが知恵・芸術・戦術の女神であること、また『復樂園』第四巻240―241行の

Athens, the eye of Greece, mother of arts

And eloquence, . . .

この美しいアテーネーの絶賛も、悪魔の誘惑の言葉であったことを考えると、「罪」の誕生譚は一考を要すると思う。

サタンは「罪」の優雅な姿にすっかり魅了され、ひそかに情を通じて孕ませた。「罪」自身が産まれたのもまた妊娠したのも、まだ天上界に居るときであった。胎児の重みを感じ始めたころ、折から戦いが起り、天は戦場と一変する。当然ながら勝利は神に帰し、味方は天上界を逃げ惑った末、天の頂から地獄へと真逆さまに追い落された。罪も身重の身で、みんなと一緒に落ちてきたが、そのとき、手に鍵を渡され、これであけないかぎり落ひとり通ることのできない門を永久に閉ざしておくようにという命令を受けた(二774)。

「死」の誕生

ここに独り悄然と坐っていると、間もなく胎児は異常に大きくなり、耐えがたい陣痛を感じた。胎児は激しくもがき、母胎の内臓を引裂くように、必殺の槍を振りかざしながら飛び出してきた。ために「罪」の下半身は、

あまりの恐怖と苦痛に振れて醜く変形する有様。母親が「死だ」と叫んで逃げると、地獄もその恐ろしい名前に震え、そのあらゆる洞穴から反響する。「死」は憤怒よりは情欲にかられて、逃げる母を引っつかみ、抱きすくめ、犯してしまった。この凌辱の結果、絶えず吠えつづけて腰のまわりに纏わりつく怪物たちが生まれた。しかも刻々に怪物たちは生まれ、刻々に生まれ、好むがまま、その生まれた胎内に戻り、吠え猛りながら内臓を餌として貪り食い、元気になってまた外に飛び出し、「罪」に纏わりつく。この箇所は、スペンサーの『妖精の女王』第一巻第一篇十五歌における、「怪物が汚れた大地に伏し、無数の子を乳房から出る毒汁で養っていたが、怪しい光が当たると子供たちはたちまち母親の口に入り込み、見えなくなった」という記述にもとづくと思われるが、ミルトンのほうが格段に詳しく、「罪」と「死」の醜悪さ、残忍さを表現している（二七七―八四）。

キリスト高擧の宣言が行われた直後の夜、そのときサタンの心に謀叛が萌す、と同時に「罪」が成人した姿で生まれる。かつ当時は一日が夜から始まるとされたことを考えると、この夜こそ、罪の世の始まりである。なお、これに「死」が加わるまでには、媾合、妊娠、出産の過程を要し、「死」の誕生をもって悪の三位一体が成立する。サタンが父、罪は娘にして妻、死は孫にして子、という関係である。

墮天使たち

「罪」は天上界で生まれたとはいえ、父親サタンが反逆を企てた大ルシファー宮殿での会議のときであったし、「死」は地獄で生まれたのであるから、「罪」にも「死」にも天上界における名前はなし。そもそも「罪」や

「死」は天上界には馴染まない。だが、他の墮天使たちは、サタンとともに、サタンに率いられて天国から墮ちてきたのである。しかもその数は、全天使の三分の一（二〇二）。それぞれが天国にふさわしい立派な名前もついていたに相違ないが、しかしサタンと同じように、天国での記録は抹消されて今は知る術もない。第一巻で列挙される墮天使たちの名前もかなり後に付けられたものである。第一巻の段階では天上での戦いに敗れ、地獄に落とされたばかり。天国では名前を抹消してしまったが、墮落天使どうしは旧名で呼びあっていたのか、われわれ人間は知る由もない。地球は造られたばかりで、神の祝福のなかにある。アダムが原罪を犯して、地獄から地球に直結する「罪」と「死」の大道ができて、墮天使たちは一挙に地球になだれこむのである。それゆえ、第一巻の段階では、天国での居場所も名前も失い、地獄で呻吟する名なしの権兵衛たちである。

やがて彼らは地上を彷徨し、さまざまな虚偽と詭言を弄して、各地でイーヴの子孫を腐敗墮落させ、造り主である神を棄てさせ、神の栄光に代えて、虚飾と黄金とで飾りたてた獣の像を、神として礼拝させるに至った。こうして彼らは異教世界の各地で、さまざまな名前とさまざまな偶像によって知られるようになった（一三六―一三九）。

ベルゼバブ

サタンの最側近にして相談役、「力においても罪においてもサタンの次に位する者」（二七）とされたベルゼバブも、その点ではおなじである。その名前は、列王紀下一二、一六、にあるエクロンの神バアル・ゼバブに由来する。エクロンはペリシテ人の五都市の一つ、ペリシテ人の領地の中で一番北に位置する。バアルは神、ゼバブは

蠅を意味する。高温多湿地帯なので虫害から守る神として崇められ、マタイ伝25では悪霊たちの首領となっている。こうして、ようやくにして得た名前であった。

サタンの十二使徒

サタンは、キリストの十二使徒にあやかり、次に登場するモロクを筆頭に十二弟子を集めた（二 392―490ファウラー注）。

モロク（一 392）

ケモシ（一 406）

バーリム（一 422）

アシタロテ（一 422）

アシトロテ（一 438）

タンムズ（一 446）

ダゴン（一 462）

リンモン（一 467）

オシリス（一 478）

イシス（一 478）

ホルス（一四七）

ベリアル（一四九）

登場順に挙げると以上のようになる。

モロク（二三九）は人身御供を要求する神（レビ記一八二）で、随天使のなかでは「最も強力にして最も獯猛」（二四）とされ、ヨルダン河東方のラバを首都とするアンモン人に、火の神として崇められた。

ケモシ（二四〇）は、列王記上十一一には「モアブ人の憎むべき神」として、アンモン人の神モロクと並べられている。アンモン人の南、死海の東方に住み、猥褻な祭儀を蔓延させた。別名ペオル（二四二）。

バーリム（二四二）はバアルの複数形、男性神。

アシタロテ（二四二）は女性神。ともに士師記二一一―一四に登場、豊穰を表わし、その祭祀においてはいかかわしい儀式が行われた。ほしいままに男女いずれの性をも、或は同時に男女両性をもとり、その霊質の柔軟なることを利用して淫行のかぎりをつくした（二四二―四三）。ユーフラテス河から、エジプトとシリアの境のペソル河までの地域で盛んであった。

アシトロテ（二四三）、前者の単数形であるが、フェニキア人がアスタルテと呼ぶ、三日月の角をもった天の女王。メソポタミアやフェニキアで崇められた愛の女神。月や金星の女神とされ、ギリシアではアプロディテ、ローマではウエヌス（英語ではヴィーナス）と呼ばれた。

タンムズ（二四四）は、植物の死と再生を象徴するフェニキアの男性神。エゼキエル八四。アスタルテの恋人、

狩猟中に野猪に殺され、その血が河を赤く染めたという。ギリシア神話におけるアドニスと同一視される。夏、タンムズの死を悼む祭りがレバノンその他の地方で広く行われた。

ダゴン（二462）は海の怪物、上半身は人間、下半身は魚。パレスチナ全域で畏れられ、各地に宏壮な神殿が建てられた。土師記一六23。

リンモン（二467）、シリア人が崇めた風と雨の神、シリアの首都ダマスコに神殿があった。列王記下五18。

オシリス（二478） 冥界の王で死者を裁く神。

イシス（二478） その妹にして妻。

ホルス（二478） その子

エジプト
代々
の神

ベリアル（二490）、墮天使のうち最も淫らで、悪徳を悪徳のために愛した、特定の神殿は持たないが、不正を嗅ぎつけば、いたるところの神殿や祭壇に姿を見せる。

OEDによると、ヘブライ語で「無用」「無益」の意から「無価値」「破壊」となり、後に、また新約聖書では、固有名詞として扱われ、悪魔、サタンと同義となった。欽定訳にはウルガタと同じく、*'sons of Belial'* のように翻訳しないままの形が残った。延べ十六回、ただしウルガタは列王記上二十一13に *'fili diabolii'* と訳されることく、ベリアルの名を残すのは十一回にとどまる。だが、その後の英訳にも独訳、仏訳にも、またわが文語訳、新共同訳にも旧約の場合には「ベリアル」の名はない。新約ではただ一回、コリント後書六15に、「キリストとベリア

ルにどんな調和がありますか。信仰と不信仰に何の関係がありますか」という言葉が見える。ここでは擬人化された悪霊の名、悪魔の名として使われているが、『失樂園』では、ミルトンは、墮ちた天使のひとりの名として使っている。

このような墮天使であれば、特定の土地や人々に結びつくことなく、人が神に背くとき、どここの神殿にも、宮廷にも、また都会の街頭にも現われた。宵闇迫る頃、酒気を帯びて街を横柄にのさばり歩く者は「ベリアルベリアルの末裔」である。ソドムの町を、またギベアの夜を思え（一493―505）、という。

「以上が位においても力においても最も主だった者たちであった」（一506）。

サタンの涙

さらにギリシアの神々が加わり、その数、幾万とも知れなかった。かつては祝福の座について不滅の天使であった仲間たち、というより配下が自分の罪科つみに連座し、自分の反逆に加担したために、永遠の光輝の座から放逐され、永劫の罰に処せられ、苦痛の運命に耐えていかねばならぬのを眼の当たりにすると、サタンも臉に憐憫と悔悟の情をうかべ、涙に咽んだ（一604―620）。

私には、サタンになおこの情が残っていることが驚きであった。全知全能の神が気付かぬはずはない。最後の審判のとき、サタンに残ったこの善性が考慮されないはずはない。

マンモン

長い墮天使のリストのなかに、もうひとり懐しい、馴染みの名が見える。「汝なんぢら神かみと富とみとに兼事かねつかふること能あたはず（マタイ六24）」という印象的な聖句で忘れることのできない「富」である。欽定訳では、*Ye cannot serve God and mannon* である。*mannon* は大文字でさえない。富を意味するアラム語の普通名詞で、ギリシア語原典、ラテン語のウルガタにも引継がれ、中世になると擬人化されて固有名詞となる。因みに最近の英訳（*The New English Bible*）では、*Money* である。ルカ伝十六13に同じ聖句が繰返されるほか、旧約には一切、この言葉はない。

『失樂園』では、マンモンは「天から落ちた天使のうちこれほどさもない根性の持主もなかった。天国にいた時でさえ、彼は常にその眼と心を下に向け、都大路に敷きつめられた財宝、つまり足下に踏みつける黄金を、直接まみ神に見える際に味わう、どんな聖なる祝福よりも遥かに賛美していた（一679―684）」といわれる。やがて人は、彼の教唆によって、母なる大地の臓腑をえぐり、隠されてあるべき宝を奪うにいたった（一684―689）、という。

善天使

墮ちた天使のうちの主だったものは、以上のとおりである。が、三分の二の天使は、天国にとどまり、神に従い、神の使者としての役割を果たした。

ミカエル

『失樂園』において最も多く名前の出てくる天使はミカエル(二二94…十二466)である。「神の如き(者)」の意。彼の剣は神の武器庫から賜ったもので、鍛えぬかれており、どんな鋭い剣も硬い剣もこれに刃向かうことはできなかった。天上の戦いではサタンと刃を交え、ミカエルの剣がサタンの右脇腹を深く抉った。ためにサタンは身を振って転々ところげ廻った(六320―328)。この記憶があるために万魔殿での衆議は直接対決を避ける方へ傾いていった。しかし勇猛果敢であるだけでなく、樂園追放の、そのときまで、アダムとイーヴに寄添うのも大天使ミカエル(十二466)であった。

ウリエル

次に登場するのは大天使ウリエル(三648)、「神の光」の意。正典のなかに天使としての名前は出てこない。偽典エノク書(九―)ではミカエル、ガブリエル、ラファエルと並び、世界の四隅を支配する偉大な天使とされる(南方はウリエルの担当)。「天圏の音楽」では、各々の天圏にはそれぞれの天圏を導く天使があるとされたが、太陽を司る者はウリエルであった(三690)。

ガブリエル

第四巻になってガブリエル(四549)の名が登場。「神の人」の意味。神の使者、神意の啓示者の機能をもつ。彼はダニエルに現れて幻の意味を説明し(ダニエル書八15―、九21―)、新約ではザカリヤと妻エリサベツに現れてバプテスマのヨハネの出生を告知し(ルカ一5―20)、処女マリヤに現れてイエス・キリストの受胎を告知した

(ルカ一26)。

『失樂園』でのガブリエルは、ウジエル、イシューリエル、ゼボンといった「自分の次に位する天使」(四七八)に対して指示を出し、厳しい顔でサタンに詰問したり(四八七)、いざ戦闘となると武勇においてはミカエルに次ぐ勇者として天軍の指揮者に任せられた(六四四―四八)。

ラファエル

第五巻になって、その名が見えるのがラファエルである。名は「神癒やし給う」の意。聖書正典には記載がなく、旧約外典トビト書に登場し、トビトの子トビアの妻となるサラを悪魔アスモダイオスから救ってトビアと結婚させ、かつトビトの盲目を癒やす助けをした。サラは七度結婚するが、その都度、新婚初夜に夫は死亡する。それはサラに恋する悪魔アスモダイオスの嫉妬のためであった。それでラファエルはトビアに指示し、魚の臓腑を焼き、その臭いで悪魔を退散させ、エジプトの方へ逃げるのを捕らえて、手足を縛り上げた(トビト八二―三)。結婚したトビアは父トビトのもとに戻り、魚の胆のうを父の目に塗り、息を吹きかけ、目の縁から白い膜をはがすと、父の視力は回復した(トビト十一10―14)。

『失樂園』でも悪魔退散のエピソードは好まれ、二回言及される。最初は第四巻166―171行で、悪魔サタンが樂園の甘い薫りに悦惚となった譬えに、アスモダイオスがトビアの花嫁サラの薫りに魅せられたが、魚の臓腑を焼く臭気で追い払われたことを挙げる。

二回目は第五巻221―223行。ラファエルの名前が初めて登場する箇所である。トビト書では、天使ラファエルは

アザリアという名前のユダヤ人となり、トビアの友人として、悪魔退散にも知恵を貸し、花嫁サラとの結婚にも尽力する。

Raphael, the sociable spirit, that deigned

To travel with Tobias, and secured

His marriage with the seven-times-wedded maid.

V. 221—223.

アザリヤという名前の人間となってトビアの友人となるのは、もちろん後のことだが、本来こういう「友誼心の厚い」(sociable)の平井正穂訳)「天使ならばこそ、神もアダムとイーヴのもとに遣わしたのである。最適任の選択であった。

因みに悪鬼アスマダイオス(またの名をアスマダイ)と天使ラファエルの接点は、もう一箇所、時間を遙かに溯って、天上でのサタン反乱の場面にあった、第六巻362—368行。ウリエルとラファエルが、金剛石の鎧を身にまとった巨大な図体で大言壮語する敵アランメルクとアスマダイを、それぞれ打ち負かした話である。敗れたアスマダイ(六365)は地獄にもいたはずだが、第一・第二巻に名前は出てこない。時間的には第六巻の天上での戦闘という事実の方が先だが、読者の印象には、第四巻の嫉妬深くて陰湿な姿の方が残り続ける。

天使ラファエルはアダムと、あたかも友人のように食卓を囲み、御子の高拳から始まるサタンの反乱と追放、天地と人間の創造に至るまでの話をする。第五巻から第八巻までを占める。第八巻は、ラファエルの忠告とアダムの感謝をもって終り、彼らは別れた。

ミカエル再登板

第九巻は、アダムとイーヴだけで行動する。だが、たちまち失敗する。第十巻は、その結果をうけて、悪天使側には活発な動きが生じるが、結局、万魔殿で全員蛇の姿に変えられてしまう。第十一巻では、アダムとイーヴの楽園追放に先立ち、神が二人のもとに遣わしたのは、今度はラファエルではなく、ミカエルであった。この交替は、ふたりの天使の性格を神がよく知ればこそである。天使はアダムとイーヴに彼らの歩まなければならない険しい前途を語らなければならない。アダムにもその緊張はつたわる。ミカエルの「物腰には威厳がある、……なんでも打明けて話せるラファエルのような親しみ易さは見えない。むしろ凜とした厳しさがある（十一 232―236）」。

楽園を追われるアダムに、今後アダムとその末裔^{すえ}がたどらなければならない多くの苦難と、しかもその苦難のなかにそれを遙かに凌駕する新たな希望があることを、歴史の中軸、贖い主の受肉、死、復活、再臨、新天新地の到来を、ミカエルは伝えなければならない（十二 321―551）。

かの天上界での戦いにおいて直接サタンと刃を交え、サタンに深手を与えたのはミカエルであった（六 320―328）。サタンと互角にあえる天使はミカエルを措いて外にはないであろう。サタンで始まった『失楽園』はミカエルで終る。終りは人類の出発である。

The end is where we start from.

T.S. Eliot, *Little Gidding*, V. 3.